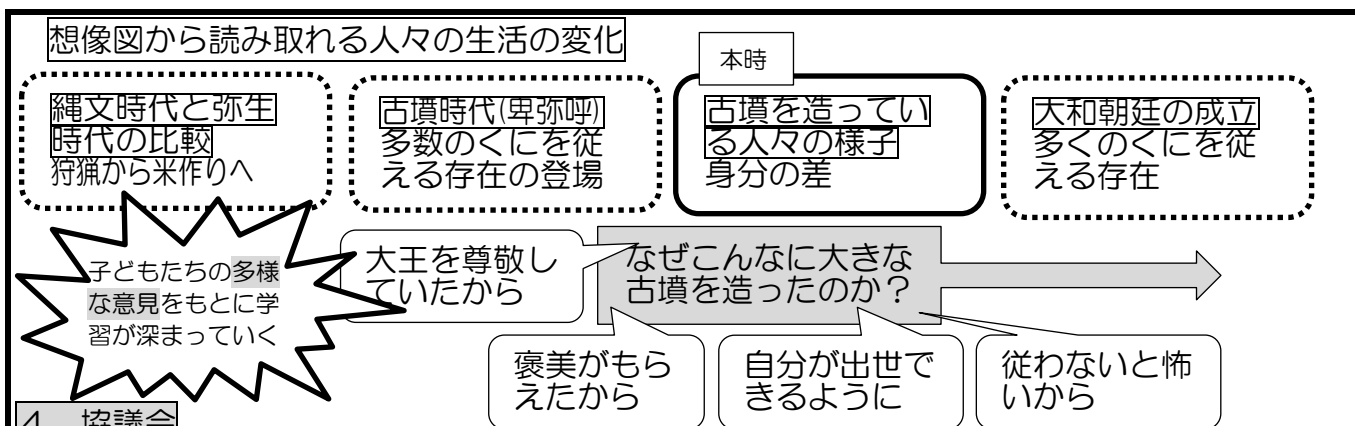


<p>横浜市小学校社会科研究会</p> <p>6 学年部会</p> <p>研修会記録</p> <p>第 3 号</p>	<p>令和6年 8月1日</p> <p>横浜市小学校教育研究会 会長 沼田 留美子</p> <p>横浜市小学校社会科研究会 会長 高畠 聡</p> <p>同 学年部長 小池 智宏</p>
<p>【提案日時】</p> <p>8月 1日 (木)</p>	<p>提案 上原 健太郎先生 (大口小)</p>
<p>【会 場】</p> <p>南太田フォーラム 3階 大会議室</p>	<p>司会 松永 快哉 先生 (市場小)</p> <p>記録 渡邊 里穂 先生 (瀬谷小)</p>
<p>1 提案内容</p>	
<p>単元名「むらからくにへ～むらからくにへ、その先は?～」</p>	
<p>2 提案者より (9:30～10:00)</p>	
<p>6年生の初めての歴史単元に入る場面で、中々身近に感じるできない歴史を身近に感じるための導入での問題意識の持たせ方、資料提示の工夫 (想像図の活用)、児童の思考を深めるような教師の発問を大切にしました。歴史に対する時間的・心理的距離感を縮めるために、想像図を使い、当時の人々にも様々な考えがあったことを想像できるように工夫し、児童一人一人が考えをもち、その考えを伝えることで多角的に学べる場面を設けた。</p>	
<p>【視点① 単元づくりについて】</p>	
<p>単元に入る前に、「歴史を学ぶ意味」について児童と考え、「過去を知り、今後に生かす」ことを確かめた。また、時間的・心理的距離を縮められるような手立てとして、当時の様子をより身近に感じられるように「想像図」を使って前の時代と比べながら学べるようにした。</p>	
<p>【視点② 協働的な学びについて】</p>	
<p>本気の学習問題の成立の場面で、大仙古墳と小学校の大きさを比べると、児童は「<u>どうやってこんな大きな古墳をつくったのだろう</u>」と疑問をもった。しかし「<u>どうやって</u>」という疑問は、古墳のつくり方だけに焦点化されてしまうので、「<u>なぜこんな大きな古墳をつくったのだろう</u>」と修正し、当時の人々の思いやくらしの様子に迫るようにした。</p>	
<p>3 実践の実際 (注目児の変容)</p>	
<p>最初は米作りによって当時の生活が大きく変化したことに気づく児童は多くなかったが第3時で縄文時代と弥生時代を比較する際に、「衣食住」がどのように変化したかに着目することで、米作りの広がりによって人々の生活に変化が生まれ、身分や貧富の差が生まれてきたという認識に変わってきた。</p>	
<p>大仙古墳と校舎の大きさを比べることによって、「なぜこんなに大きな古墳をつくったのか」という児童の問いが生まれ、本気の学習問題が成立した。</p>	



【視点①について】

想像図は、初めて学習する歴史について視覚的な支援ができる。ただし、想像図だけでは根拠がはっきりしないため、他の資料や実物も準備して事実から話せるようにする必要がある。想像図は、今後の単元でも様々な場面で登場するため、学び方が身につく、学びの土台をそろえやすい。「学力差があったとしても使える」「比べる視点がはっきりする」などメリットが多い。

【視点②について】

子どもから最初に出た「どうやってつくったのか」という問いから自然と「なぜつくったのか」という問いを引き出せると考えられる。「どうやってつくったのか」という問いを深めることで、渡来人の活躍や中国・朝鮮半島とのかかわりも見えてくるので、じっくり考える時間があってもよかった。今後も子どもの問いや気づきを大切にしていきたい。

<講師の先生より> 教育課程推進室 森 圭一朗先生

社会科の目標とは？どうして学ぶのかを学習指導要領で確認する必要がある。グローバル社会に生きる子どもたちに求められているのは、「公民としての資質・能力」である。政治単元と歴史単元の順序が変わったのは、先に現在の社会の在り方を学んでおくことで、たくさんの人たちが関わって自分たちの生活が支えられていることに気づき、この日本という国がどのように成立してきたのか考えるという視点をもって歴史単元に入ることができるからである。

そこで本時においては、組織や身分の違いができてくることを児童に考えさせたい。知識だけで子どもたちの考えや価値観が入ってこない空虚な学習になってしまう。歴史の営みを学ぶことで「どのような未来をつくっていくか」という視点を子どもたちがもてるようにすることが求められる。

<講師の先生より> 瀬谷さくら小学校 場家 誠先生

それぞれの時代に生きた人々の「思いや考え」にどうやって迫るかを予め考えておくことが重要である。資料からどんな情報を読み取らせたいか、どんな事実気付かせたいかを教師が練っておくことが必要である。想像図だけでなく、矢じりや石包丁などの具体物の見せ方や教師の問いかけを工夫するによって子どもたちに考えさせたいことを焦点化し、興味や関心を高めることができる。

また、教師が使う言葉一つひとつにこだわる必要がある。「なぜ」「どうやって」「どうして」など同じことを聞いているような言葉でも、子どもたちの反応は変わってくるため、十分検討したい。

最後に、歴史を学ぶ意味とは、「歴史を学ぶこと」(知識)と「歴史事象を取り上げた学習を通して学ぶこと」(よりよい社会を求めた人々の営みの積み重ね)の違いを意識して考えさせたい。先生たちには、これからの社会をどうやってつくっていくかを見据えて授業をつくってほしい。

子どもたちが自由に話し合っ、安心感がある学級経営ができているので、そうした学びの土台ができているのが素晴らしい。

文責 渡邊里穂(瀬谷小学校)